



カトリック新潟教区
編集発行人 教区報編集部
〒951-8106
新潟市中央区東大畑通1-656
TEL. 025-222-7457
FAX. 025-222-7467

言
神
修
道
会

来日一〇〇周年記念

秋田で感謝ミサ

十月二十七日、神言修道会が日本における宣教活動を開始して一〇〇年となる節目の年に、最初の宣教地であった秋田の地で、記念の感謝ミサをささげた。

感謝ミサは九時三十分から秋田教会で駐日教皇大使アルベルト・ボッターリ・デ・カステッ

ト・ボッターリ・デ・カステッロ大司教、レオン・カレンガ参事官を迎えて、菊地 功司教司式三〇人の司祭共祭で盛大に執り行なわれた。



秋田地区信徒をはじめ山形・新潟・新発田・長岡地区信徒や長崎・名古屋・東京からの巡礼団が参加して二〇〇人を超える人々でこの日を祝った。

市瀬英昭神言修道会日本管区長はミサ説教で、来日一〇〇年を迎えたこれまで導いてくださった神のはからいに感謝をささげ、一九〇七年九月八日無原罪の聖マリアの祝日に横浜港に上陸した三人の神言会員(チェスカ、ウエイグ、ゲルハルドの三神父)から始まった神言会日本管区の活動を振り返って、祈りによって「神のことば」にふれて癒やされて新しくされ、宣教にかりたてられた宣教者に学び「神のことば」の宣教にまい進しようと全員に呼びかけた。

ミサ閉祭後同聖堂で、神言会司祭リチャード・ジップル神父の基調講演「神言会日本管区の一〇〇年の歩み」で神言会来日から現在までの日本管区の宣教活動の歴史と将来にむけての課題と展望が語られた。

会場を移しての祝賀会では、聖霊会シスター達によるコーラスのリードで、二〇〇人の全員がにぎやかに唱って喜びを分かち合った。



聖霊会シスターの合唱

教皇大使

2小教区で主日ミサをささげる

土崎教会で十月二十八日

教皇大使アルベルト・ボッターリ・デ・カステッロ大司教

は十月二十八日九時三十分から秋田市の土崎教会(主任・飯野耕太郎神父/秋田地区)で司式して主日ミサをささげられた。七〇人を超えた信徒が祈った。

教皇大使は日本語の習得に務めておられ、ローマ字のテキストを使いながらしつかりした日本語で司式され、英語の説教は通訳を菊地司教が務められた。

ミサ中の祝福は飯野神父のリクエストに快く応えてくださり、ミサに参加した一人ひとりに個別に祝福をくださった。



教皇大使を囲んで

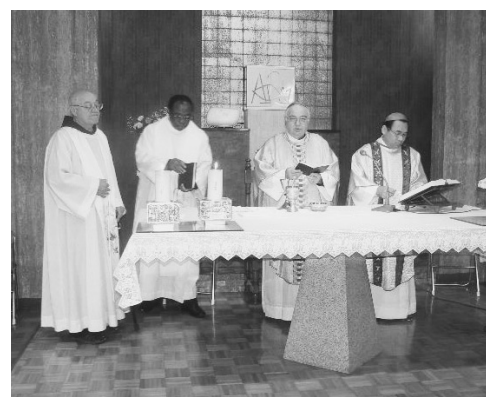
ミサ後の信徒会館での茶話会では女性の信徒グループ「なんちゃってシスターズ」が美しい歌声を披露し、コーラスに触発されたのか、大使はサンタルチアやオーソレミオなどイタリア歌曲をソロで熱唱されて喝采が

やまなかった。

表町教会で十一月四日

教皇大使は十一月四日十時十五分から長岡市の表町教会(主任・ブルーノ・ファブリ神父/長岡地区)で表町と福住両教会の信徒多数が参加して主日ミサをささげられた。

ミサには教会から40キロ程のところにある国際大学(南魚沼市国際町)からも留学生が参加して、ミサ後の茶話会ではルワ



教皇大使小教区で共に祈る

ンダからの留学生はコンゴ出身のカレンガ参事官と懐かしそうに話し合うなど和やかなひとときを過ごされた。

リアリティのある信仰

信仰は常に具体的であって「今」を生きていなければ意味がないと思います。「現在」には成功も失敗もどちらの「可能性」も未知なるものとしてあるでしょうが、「過去」には成功と失敗は現実として存在したのであり、そこに「現在の記憶」があるだけで、あらたな「可能性」はありません。

すでに分かり切った記憶の中に漂っている方が安心であるのは確かですから、軸足を過去に踏み入れておいた方が、失敗がないような気になってしまいません。だから冒険が出来ません。

過去はもう存在しないにもかかわらず、そこに軸足を置くことが出来るなどという勘違いをしてはなりません。

信仰も、リアリティがなければ単なる趣味の世界の出来事にか過ぎないではありませんか。ご自分にとって、イエスはリアリティを持って存在していますか。

神はご自分と共に、「今」を生きていますか。

「今」を生きていない信仰は、その存在のリアリティを感じていない神への信仰は、まだまだ育てていく余地が大きくあるのではないのでしょうか。

新潟教区のホームページ
司教の日記(九月二日付) から転載

新潟教会献堂八十周年

十一月三日、新潟教会（主任・大瀧浩一神父／新潟地区）は教皇大使アルベルト・ボッタリ・カステッロ大司教、レオン・カレンガ参事官を迎えて献堂八十周年を記念した菊地 功司教司式のミサをささげた。

十一時開式の記念ミサには市瀬英昭神言修道会日本管区長をはじめ二十三人の司祭団に二六〇人を超す教区内外の修道者、信徒が集まって聖歌隊の歌うデ・アンジェリをはじめ喜びと感謝の歌声が大聖堂に満ちみちた。菊地司教はミサ説教で、いま



新潟教会出身招待シスターたちの聖体拝領

から一〇〇年前一九〇七年に神言会の三人のドイツ人宣教師が初めて日本にそれも当時の秋田に派遣され、厳しい状況のもとにありながら各地に宣教の種をまき続け、八〇年前にその宣教師の一人チェスカ師の指導のもとでこの大聖堂が献堂された歴

史を振り返って、次のように呼びかけた。
「いまからは想像もできないような困難の中で宣教師たちがこれほどの事業を成し遂げることでできたのは、第一には福音宣教への熱意であり、第二には協力を惜しまなかった信徒の方々の存在があつて、聖堂を建てようという意気込みが宣教師にも信徒共同体にもあつたのだらうと想像されます。
いまこの聖堂を受け継いでいる私たちには、聖堂にふさわしい意気込みを持った共同体をここに存在させているでしょうか。
神にささげられた聖堂は、生き生きとした力ある共同体の存在が不可欠なのです。共同福音宣教のわざとして、共同

体を強めていく努力をしましょう」。

新潟教会は献堂記念行事期間を九月八日聖マリア誕生の祝日から十一月二十五日の王であるキリストの祭日までとして、九月八日に記念の典礼講演会「ミサを生きる」（白浜 満神父／福岡サン・スルピス大神学院）を開催し、十一月三日から十七

土崎教会と幼稚園

ともに創立50周年

九月十七日、土崎教会（主任・飯野耕太郎神父／秋田地区）と土崎カトリック幼稚園はことし創立50周年を迎えて感謝ミサをささげ祝賀会を開催した。

当日、秋田県内は集中豪雨であつたが十時からの感謝ミサには二〇〇人を超す信徒達で聖堂はいっぱいになり、入りきれない人は小聖堂でのミサ参加となつた。

菊地司教をはじめ神言会日本管区のブルーノ副管区長や高



14人の司祭で共祭ミサ

者のコーラス、聖歌隊「なんちゃってシスターズ」の素晴らしい女性コーラスが披露されて、青年たちの器楽演奏があつて最長老のミューラー神父（能代教会）が独唱で花を飾り、参列者全員によるアーメンハレルヤの大合唱で閉幕した。

大館教会は創立50周年

十月十三日、一九五七年創立の大館教会（主任・岡崎才藏神父／秋田地区）は創立50周年の記念ミサをささげた。

ミサには菊地司教をはじめ秋田地区の司祭、小教区代表の信徒が集まり、25年ほど前に献堂された現在の聖堂は参加者で一杯になって喜びを分かち合い感謝をささげた。



教区保育者研修会

八月十七、十八の両日、新潟市内のホテルを会場に教区カトリック保育者研修会が開かれた。ことし37回目となる研修会には一三〇人を超える教区内のカトリック幼稚園や保育園の園長や職員などが参加した。

研修会テーマは「かけがえのない一人ひとりを育む」で、カトリック幼稚園などで働く者としての共通認識を新たにすると二日間であつて、一日目は新潟大学教授時代に附属幼稚園長であつた間藤 侑さん（新潟青陵大学教授）の「個を尊重した幼稚園理解」のテーマで具体的な幼児教育について体験とおしての講演。

二日目はグループに分かれての話し合いとその発表。最後にミサをささげて閉会した。
昨年十一月、司教団の学校教育委員会は「カトリック幼稚園の使命を果たしていくために」と題した文書を二部構成で作成

した。一部は経営に携わっている人たちに向けて、もう一部は実際に保育に携わる教職員向けのメッセージである。
危機的現状を指摘し、将来への十分な備えを求め、意識と機構の改革を促す文書である。このメッセージが出された背景は、やはり召命の減少に端を発する後継者不足のために、戦後から今に至るまで各地の教会で幼稚園園長としてリーダーシップをとってきた司祭や修道者が減少しているという現実がある。
新潟教区でも今現在概ねすべての幼稚園や保育園で司祭や修道者が園長を務めているが、十年後を考えると幼稚園や保育園が「カトリック」としての性格をしっかりと維持していくための方策を講じる必要がある。
菊地司教は「今年度中に新潟教区としての幼稚教育への基本方針を明文化し発表したいと考えている」と話した。

列福式の日程決まる

式典は来年十一月長崎で

日本で初めて行われる列福式となるベトリ岐部と一八七殉教者の列福式の日程が、来年十一月二十四日長崎市で執り行われることを司教協議会列聖列福特別委員会が発表した。

九月二十九日、司教協議会が長崎大司教館での記者会見で発表したことは日程などで、まだ列福式の会場や開始時刻など詳細は明らかになっていないが、司教協議会会長岡田武夫東京教区大司教は列福式決定によせて、次のように談話した。(要約)

「この記念すべき式典の開催地に、殉教者ゆかりの長崎が選ばれ、教皇ベネディクト十六世代理の列聖省長官を迎えることも、また意義深いと思います。新福者が殉教を遂げた時代は、政治や社会体制、価値観などが、現在のそれと大きく異なります。しかし、人間の基本的な尊厳と信仰の自由を守り抜いたその生涯は、キリスト信者であるか否とに関わらず、現代に生きる私たちに希望となる数々のメッセージを含んでいます。列福式まであと一年、私たちは、いま、式典そのものの準備もさることながら、日本の教会の偉大な先達が残してくれた遺産の、もつ意味をじっくりと深め、自分のものにしていく期間にしたいと思っています」。

各地区で信徒大会

新発田地区

五月十三日、加茂教会で菊地司教を迎えて地区内の司祭・信徒七〇人余が参加して地区信徒大会が開かれた。

ことしの大会は新潟地区にとって重要な課題の一つである「福音宣教をする教会共同体であるために」地区としてどのように実現するかを分かち合うことをテーマにした。

九時半開会。地区内の諸報告のあと菊地司教司式のミサで始まり、ミサ説教で菊地司教はアジア宣教大会の「イエスとの出会いの物語」を語られ、信徒大会に期待していると強く呼びかけた。

ミサ後、アジア宣教大会(〇六年十月タイのチェンマイで開催)に参加した福島祥紘さん(新潟地区寺尾教会)がアジア宣教大会報告と自らの人生体験を交えて「いま教会が現実社会の中にか」を熱く語った。



加茂教会に集う

人生には失敗、病気、不幸なものが付きものだが、信者としてそれをどう受け止めたか、普通ならば誰々が悪いとか、何々のせいだと不満を言うだろう。でも病気のせいと思わずに病気をしたおかげでと思いついてみたい。

山形地区

五月二〇日、鶴岡教会で「神に与えられた命」をテーマに山形地区信徒大会を開催し地区内司祭・信徒一五〇人を超える人が参加した。

大会の基調講演講師のシスター渡辺和子さん(ノートルダム清心学園理事長)から「時間の使い方は命の使い方」と題した一時間半程の熱のこもった講話に聞き入った。

「命とは、私達それぞれが使うことのできる時間のことである。その時間の長さではなく質が大切である。つまりどのようになんか、命の質をどういうものにするかが、人生にとって重要である。」



鶴岡教会で地区大会

どんな不幸を吸ったとしても、感謝の息を吐きなさい」。午後は各小教区で分かち合いを重ねてきた大会テーマについての報告があり、菊地司教司式の大会ミサで閉会した。

長岡地区

六月十日、柏崎教会を会場に長岡地区信徒大会を開き、地区内八教会から三〇〇人近い参加者があつた。



柏崎教会に300人

ことしの大会には二十三人の中高校生も参加したが、十六人が前日から泊りして、東京から参加したシスター(マリアの宣教師フランシスコ修道会)二人を囲んで感動的な体験を学んだ。大会当日午前中は「障害者自

立支援施設のジャム工房白根」を経営する山崎 隆さんと「一八八福者殉教者が現代に訴えるもの」と題したマリオ・カンドウチ神父(高田)が講話した。午後は、地区小学生夏の合宿の資金づくりのために、35

新潟地区協議講演会

一八八殉教者が現代に伝えるもの

六月十日十四時から新潟カテドラルで古巣 警神父(殉教者列福調査特別委員会委員/長崎教区)を講師に招き講演会を開催した。

当日会場に集まった新潟市内の各小教区から一〇〇人を超えた参加者は、いま私たちが抱えている大切な諸問題に多くの示唆が与えられた。

講師は問いかけた。

私たちの信仰は、現代の混迷した時代に、何も役にたたないのでしょうか。

カトリック信者は、今の社会に役立つことはないのでしょうか。

現代の日本の教会が、現代社会に向かつてアピールすべきことは何か。

教会の本来の使命である福音を伝えるために、日本の教会のあり方を、信者のあり方を真剣に考える時がきているのではないのでしょうか。

困難を極めた時代の中で信仰を愚直なまでに生き抜き、いのちをかけて福音を証した殉教者たちの生き方は、私たちに励ましと支えになることではないでしょうか。

人の参加小学生がコロケ作りをして五〇〇個を完売。総会ではフィリピン共同体からの報告と、司祭共祭の地区信徒大会ミサではじめて二人の聖体奉仕者が奉仕したミサをささげて閉会した。



殉教者のメッセージから学ぶ

講師は一五四九年のザビエル宣教団の日本上陸以来、一八七三年のキリシタン禁制の高札撤去(キリスト教の黙認)までの三三四年間の日本各地での殉教の歴史を振り返り、特にローマまでシルクロードを経由して歩き続け、司祭に叙階されて、更に日本宣教のために母国に戻って江戸で殉教した不撓不屈のペトロ・カスイ岐部神父の歴史と新潟教区の五十三人の米沢の殉教者たちに光を当て、さらに殉教の歴史の中で名前も知られない何万何千ともわからない殉教者のあることに思いをはせていこうと響き、明日に向けて決意をさせた二時間の講演であった。

米沢の殉教者たち

二〇〇二年十月十四日、ルイス甘糟右衛門と五十二人の同志の殉教遺跡を発見した神言修道会のシュヴィエントク神父が、一九二七年(昭和二年)十一月二十七日に米沢(米沢市館山口町)の民家の一室を借りて聖テレジア教会を創立してから七十五周年となる記念の感謝ミサにあずかり、教区殉教地の北山原巡礼を果たそうと、新潟・秋田・山形・茨城の各県小教区から貸し切りバスなどで集まった司祭、修道者、信徒たち約三〇〇人で米沢教会の聖堂と前庭は埋まった。

感謝ミサは、前日に体調を崩された新潟教区長佐藤敬一司教に代わって山形地区長の本間研二神父(鶴岡教会主任)の司式でささげられて、ミサの中で米沢教会主任の千原通明神父はパンとブドウ酒に加えて、一枚の額を奉納した。

それは一六二九年(寛永六年)七月二日付で米沢での殉教をローマに伝えたイエズス会のジョアン・バプチスタ・ポッロ神父の三十三枚に及ぶ報告書である。

その手紙は非常に詳しく殉教の様子だけでなく、当時の米沢の社会や主立った人物について日本人にしかできない表現と知識を示しているの、資料を集めるための日本人の協力者がいたのだらうと推察される。

ミサに奉納されたポッロ神父の手紙はローマで原文のまま完全な形で残っているもののコ

ピーで、ローマの許可を得て初めて公開されたが、三十四年前の殉教の事実とともに、現代に生きる私たちへのメッセージであって、思いを北山原殉教の時代へと遡らせる。

ミサのあと巡礼団は額に納められたポッロ神父の手紙を掲げた殉教者を表す深紅の祭服姿の千原神父と二人の待者を先頭に、教会から殉教地へ向かう米沢市街地約2キロの道を歩いた。



殉教地 北山原

北山原では十字架上のキリスト像と左右の聖母マリアと使徒聖ヨハネ像の前で、千原神父がポッロ神父の手紙を示しながら、なぜ米沢の殉教が感動的であるのか。どのようにして手紙がローマに届いたのかを語った。

殉教の当日、一六二九年一月十二日(寛永五年十二月十八日)夜明けごろ、一行はきちんと並んで道に出て、先頭に一人の小姓が聖母マリアの旗を掲げ、もう一人はろうそくを持ち、数人の家来が続き、その後には子供を抱いた婦人たちが歩き、老人が続き、最後にルイス甘糟右衛門の順で、殉教者たちの行列は北山原へと一歩一歩を祈りのように心の中をかみしめ

ながら進んだと報告書に書かれているという。

一月十二日、雪で覆われた米沢北山原で彼ら五十三人は喜びと祈りのなかですべてをキリストに捧げたのであった。

彼らの多くは武士であったが、その中には家に仕えていた者や知行地の農民も含まれていた。年令は一歳の幼児から老夫婦まですべての世代にわたっている。

男性三十人、女性二十三人。うち九人が五歳以下であった。

『ここで死ぬ者たちは信仰のためにいのちを捨てて、いさぎいい人たちである。皆のものの土下座するようにお願い申す』。刑場に奉行の声が響いた。永年の幕府からのたびたびの圧力に抗することが出来なかった米沢藩の苦渋の決定であり、信者たちは最後まで好意をもって受け入れられ、人々はその死を惜しんだ。

米沢の信者たちの特長はキリストの教え、信仰が宣教師によつて拡がったのではなく、米沢藩主上杉景勝の名将ルイス甘糟右衛門信仰を中心に、甘糟家の一族、家臣や知行地の農民の間にも伝えられ、当時は一〇〇人以上の信者がいたといわれている。

一六一〇年(慶長十五年)頃右衛門は江戸でルイス・ソテロ神父から洗礼を受けてルイスと名乗った。

右衛門は一族に信仰を伝え、二人の息子ミカエル甘糟太右衛門とビンセンチオ黒金市兵衛とともに他の武士やその家族に信仰の種をまき、輪が広がるこ

とに信心の「組」を作り、家臣や知行地の農民の間にも信仰が伝えられ、共同体(教会)が確実に成長していった。右衛門を中心とする米沢の教会にはおよそ十五年の間には司祭は住んでいなかったが、信者は「組」の組織によつて支えられ、きずなを保っていた。

信者は定期的に集まり、霊的読書と祈りを土台に、みなし児や病人の世話、貧困者の支援を行った。

「組」を世話する組親は求道者を教え、葬式や結婚も司式した。惣親と呼ばれた右衛門の説教は殿談義として多くの民衆の心に届いた。年に数回巡回する司祭は組親と連絡をとつて、より高い教義と霊性を学ばせ、信者のためにはミサと「ゆるしの秘跡」を行うだけだった。

目覚めた信徒のいる教会は自立し、感化力がある。それは昔も今も変わらない。現代日本の教会が模索する「信徒の教会」がすでに米沢にあった。

一九八一年ヨハネ・パウロ二世教皇は来日の折、再三にわたつて日本の殉教者について語られた。それを機会に国内国外でキリシタン時代に殉教し、まだ列福されていない殉教者への関心が高まった。日本の司教協議会はこれを時のしるしとして捉え、一九八四年にローマ聖座の承認を得て「ペトロ岐部神父と一八七殉教者」の列福調査をはじめた。

このたびの式典は日本で初めて行われる列福式となり、また列福される人びとがすべて日本人であるのも初めてのこととな

る「ペトロ岐部と一八七殉教者の列福式」が、来年十一月二十四日に長崎で行われることが決まり、列福式の準備がすすめられている。

この列福を受けることになっている一八八人の殉教者のうち、新潟教区からその中では最も多い五十三人が殉教した米沢の殉教地北山原でのお祝い会は、二〇〇九年五月十六日(土曜日)に行う予定になっている。

教区としてはその前の一年間を特別な祈りの期間に定めることや、小冊子の発行、記念の碑の建立なども計画されている。

菊地司教は「歴史を振り返れば私たちの信仰は、初代教会の頃から殉教者の血を礎として築かれた教会共同体を通じて受け継がれ育まれてきました。新潟教区における教会共同体も米沢をはじめ各地でいのちを捧げた多くの殉教者の血を礎として成り立っています」。

私たちの信仰の先達は、神に對する完全な信頼と福音に反する価値観への完全な拒絶という生き方を、現代社会に生きる私達に模範として示されています。今、その信仰を受け継いだ私達はその信仰と姿勢に倣って、新潟教区における教会共同体の更なる育成に力を注がなくてはなりません」と呼びかけている。

(教区報編集部)

主な参考資料

※米沢の殉教者／結城了悟著一九八七

※北山原巡礼特別号／山形教会報

※愛の証／列福調査委員会編

※ペトロ岐部と一八七殉教者／列聖列福特別委員会編

二〇〇七・九・二八

司教の日記抄

「若者たち」なんて呼び方自体が古くさいのかも知れませんが、新潟教区その「若者たち」の十数人が、昨日から今日にかけて新潟教会信徒会館で集まり(合宿)を行いました。◎教区の担当者は石黒神父と高橋神父ですが、今回は山形地区からもワルヨ神父が参加してくれました。◎集まって来たのは主に新潟在住の若者でしたが、秋田や山形からも参加がありました。◎今回は主に新学期も始まり秋田から新潟へ移ってきたリーダーもいたりして、まず親睦を深めることと、夏の集まりの計画を練ることだと聞きました。◎しっかりと自分たちでいろいろ計画しているようで、昨晩などはなんと夕食後に自分たちで「わちあーい」をしたり、今朝もしっかりと起きて朝六時半のミサに参加したり、たいしたものだと心から頼もしく思いました。◎昨年末にも新潟教会で合宿がありましたが、それぞれの小教区で同年代の仲間が減少している現実を考えると、こうやって折を見てみんなで集まることはとても大切なのだと感じています。これからも是非こういう集まりを続けていきたいと思います。◎教会を中心にして気張ることなく何げなく、みんなが繋がっているというのは、一つの理想かも知れません。いろいろなタイプの人に、それぞれ「なにげ」に居場所がある。そういう集まり(共同体)に育って欲しいと願っています。(教区のホームページ二〇〇七・五・五から)